

特別講演

「天国へ生まれ出る」

日本聖公会中部教区 主教補佐 テモテ 土井 宏純 司祭

2021/11/2

【講演要旨】

マーガレット・ヤング先生は宣教師として来日した祈りの人でした。彼女は博愛と奉仕の心、そしてフレーベルの幼児教育論によって柳城学院の基礎を築き、その精神は今も私たちに受け継がれています。教会において11月は亡き人々を思う月ですので、今日与えられたこの時間に、私たちはキリスト教の死生観について考えてみたいと思います。

「死んだらどうなるのか」という宗教的な問いに対して、キリスト教は「天国へ生まれ出る」と答えます。イエス・キリストが「わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとの迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。(ヨハネ 14:2-3)」と語っている通りで、イエス様をキリストと信じたすべてのクリスチャンは、死んだ後、天国で生きる場所が用意されるのです。

ちなみに天国とは、聖書に書かれている「天の国」あるいは「神の国」のことで、もともとは神の支配とか神の御手に包まれた場所という意味です。イエス様は宣教活動の第一声で「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。(マルコ 1:15)」と語りました。ここにイエス様のメッセージは集約されていると言えます

キリスト教では「この世」よりも死後の世界の方に重きを置きます。つまり、この世で生きることは天国で生まれ出るための準備段階と考えるわけです。ですから、クリスチャン同士の交わりの中には、死んで天国に行った人たちも含まれていて、天国から私たちは祈られていると感じることが大変重要になってきます。

さて、私は1年前に姪を亡くしました。結婚して間もなかった彼女の死は、「神様、どうして？」という問い掛けとなりましたが、もちろん答えは私には分かりません。神様を恨む気持ちが無かったわけではありませんが、しかし、十字架上のイエスも「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。(マルコ 15:34)」と問い掛けつつも、最後は「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。(ルカ 23:46)」と大声で叫んで、この世の命を神様に返されました。だから、わたしも姪の命を神の御手にゆだねると共に、彼女が天

国で聖徒に連なったことを信仰によって確信したいのです。

他にも、私はいままで何度となく、愛する我が子を亡くされた両親と向き合ってきたが、そのたびに「私の子どもは天国で元気になっていますよね、天使と共に私たちを見守ってくれていますよね。」という両親の声を必ずといっていいほど聞いてきました。これは基督教の死生観がノンクリスチャンの人々にも受け入れられている証拠と言えましょう。

柳城生の皆さんも、これからの長い人生、我が子に係る辛い経験をすることがあるかもしれないですが、今日話を覚えておいてもらえると嬉しいです。そして、天に召された柳城の先生方が、過去ではなくて今この時に、私たち一人ひとりに天国からエールを送っていることを覚え、その声に敏感でありたいと願います。(文責：総務課 加藤)